



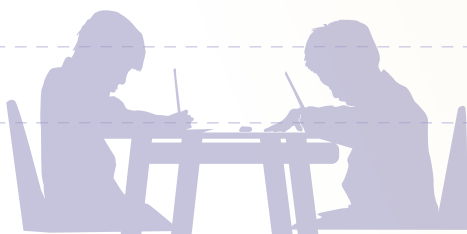
特集

「小6統一合判」 中学入試レポート vol. 1

保護者の意識と教育の変化から 多様化した入試に チャンスを見出す!

～ 2019年入試結果から探る、2020年首都圏中学入試展望～

皆さんの先輩にあたる受験生と保護者が、2019年の中学入試に親子で挑んだ2月から、すでに2ヶ月が過ぎた。今回は、新6年生になった皆さんが迎える、初めての「小6統一合判」テストだ。前回1月の「小5統一合判」テスト（5年生最終回）のときには、「2019年入試をしっかり見据えて、親子で新たなスタートを!」と述べた。今回は、この2019年の人気動向から読み取ることができる、来春2020年入試の展望をお伝えしよう。



首都圏模試センター

首都圏の私立・国立中の受験者総数は 5年続きで増加して、「47,200名」に！

今春2019年の首都圏中学入試は、前年に比べて受験生数が2,200名も増加し、受験者総数は47,200名（首都圏模試推定による）となって、受験者数と受験率を示す下記のグラフは5年続きで右肩上がりとなった。

2008年のリーマン・ショックの年から、年々減少してきた中学受験生数は、2014年を境に上昇に転じ、5年続きで増加に向かった。そしてこの増加傾向は、来年2020年入試でも引き継がれることが予想される。

この増加傾向の理由には、やはり「2020年大学入試改革と日本の教育の変化」がある。すでに1年数ヶ月後に迫った（現・高2生からが最初の当事者となる）「2020年大学入試改革」以降、大学入試のあり方が変わるばかりではなく、今春2019年の中学入試に挑んだ現・中1の学年が大学受験に挑む2024年は、大学入試改革の第2期（5年目）と言われる本格的な改革の初年度となる。そして現・小学校6年生以下の子どもたちが大学や大学院を卒業して社会に出る2029～2031年以降の日本の社会や人々の生き方は、現在とは大きく変化することが予測されている。

かつてアメリカの教育学者キャシー・デビットソン氏（当時ニューヨーク市立大学教授）は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していな



今春2019年入試でも前年並みの志願者を集めた開成中の入試風景。

い職業に就くだろうと予測し、マイケル・A・オズボーン氏（当時オックスフォード大学准教授）は、「今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」と予測した。

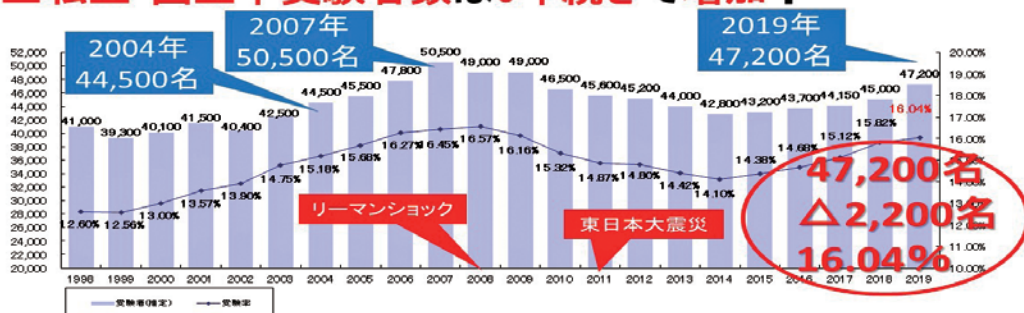
そして前者の言う「2011年度にアメリカの小学校に入学した」子どもたちとは、すでに2年前の2017年4月に中学に入学した学年の子どもたちであり、後者が予測した未来は、まさにこの世代の小学生が中・高・大学や大学院を卒業して社会に出るときの「AI（人工知能）時代」の到来を意味している。

さらには、現在の小学6年生が38歳になる2045年頃には、シンギュラリティ（技術的特異点）という分岐点を迎え、「AI（人工知能）が人間を超える」時代が訪れるとさえいわれている。

急速に進むグローバル化、ボーダレス化とAI（人工知能）の進化によって、現代の子どもたちは今後「答えがひとつに定まらない」人類的な課題と

2019年中学入試はどうなったか？

■私立・国立中受験者数は5年続きで増加！



ピーク時から徐々に減少してきた中学受験者数は、2014年を境に下げ止まり、2015年～2019年にかけて「5年続き」で続けて増加へ！



特集 保護者の意識と教育の変化から多様化した入試にチャンスを見出す！ 2019年入試結果から探る、2020年首都圏中学入試展望

向き合い、その解決の糸口を探っていかななくてはならない世代なのである。

そのように「今後（未来）の社会が変わり、そこで求められる力が変わり、大学入試も変わる」と言われる時代にあって、子どもたちがその時代をサバイブし、より良く生きていくための力を考えたときに、中学受験生と保護者の「学校選び」の観点も少しずつ変わってくるのは当然のことだろう。

同時に、多くの私立中学校も、今後の「変わる大学入試と日本の教育」への対応の必要性から、自校の教育にアクティブラーニングや探究型の授業の導入や「21世紀型スキル」の育成を積極的に謳うようになってきた。

その傾向や方向性が中学入試にも色濃く反映されたひとつの側面が、今春2019年の首都圏中学入試で一段と目立つようになった「学校選びの成熟化・二極化」と「私立中入試の多様化」に他ならない。

小学生と保護者の選択肢を広げた 私立中入試の多様化！

そうした今春2019年の首都圏中学入試で目立ったいくつかのトピックスを12ページのコラムでご紹介しておこう。

そこで紹介したトピックスは、いずれも最近マスコミでも度々話題にされるようになった「2020年大学入試改革」と「日本の教育の変化」につながる動きであり、それは現在の小学生の若い世代の保護者（ミレニアル世代と呼ばれる）の志向や

行動様式の変化を反映したものでもある。

この4月から新中1になったお子さんたちの学年は、2020年度の大学入試改革から5年目を迎える2024年度の大学受験生。当初4年間は現行の英語入試と併用される「大学入学共通テスト」の英語も、この年からは民間英語検定への完全移行が予定されている。こうした本格的な大学入試改革の最初の当事者が、現在の中学1年生の学年であり、それに続く現在の小学生はすべて当事者ということになる。

だからこそ、来春2020年入試でも、こうした動きはいっそう加速され、顕著なものになることが予想される。以下にそうした動きとその背景について述べていこう。

多様化した私立中の新タイプ入試は 小学生の才能を評価する“出会いの場”

2017年～今春2019年にかけての首都圏中学入試では、1月の埼玉・千葉入試の時期から、東京・神奈川の私立中入試のスタート日である2月1日の直前～当日～入試後にかけて、多くのマスコミ（新聞・テレビ・雑誌）が「私立中入試の多様化」に目を向けた。

この2～3年の間に、中学受験の「新市場拡大」のために、さまざまな形態の「新タイプ入試」が多くの私立中学校で新設・導入され、それが今年も一段と増加したからである。

その私立中の多様化した入試の形態は、「適性検査型（公立一貫対応型）入試」をはじめ、「合科型・総合型入試」、「記述・論述型入試」、「PISA型入試」、「思考力入試」、「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」や「英語（選択）型入試」などに加え、「プログラミング入試」や「STEM入試」、「サイエンス入試」なども登場し、バリエーションは多岐にわたるようになった。

それ以外にも「得意科目（1科・2科・3科）選択型」や、従来から存在した「帰国生入試」や「推薦・第1志望入試」などの増加も昨年以上に目立つようになった。今春から世田谷学園や巣鴨、普連土学園で新設された「算数1科目入試」などがその典型といえるだろう。山脇学園では「国か算



今春2019年入試では2月3日午前11時に、英語入試の会場に、保護者や関係者らが集まり、入試の様子について説明を受けた。

どちらか1科選択」という午後入試が新設された。

これらの新タイプ入試が導入されることで、進学塾で2～3年にわたって私立中受験のための勉強を十分にしてきた受験生だけではなく、教科によって得意・不得意の差が大きな受験生や、受験準備を始めるのが遅かった小学生、多様な学校生活や学習歴（習い事やスポーツなども含む）を経てきた小学生が、私立中を受験～進学することができる選択の機会が広がった。

つまり、こうした多様なタイプの入試（＝多様な受験生を迎え入れることのできる入試）を、多くの私立中が、新たな受験生と保護者との“出会いの機会”として、また今後の日本の教育や大学入試の変化に対応した自らの教育姿勢を反映する“メッセージ”として導入するようになってきたのである。

せっかく私立中学校側が、そうした新たな受験機会を設けてくれたのであれば、受験生（小学生）と保護者は、自身（わが子）の得意な教科や強みを生かして、それに合った入試を実施している私立中に、自信を持って挑戦していけばよい。

そうした意味では、この「日本の教育と大学入試」が大きく変わろうとしている時期に、その変化を受けて、中学入試で問われる学力観や入試観そのものも変化したことで、入試形態も多様化したと理解すべきだろう。また、それによって、多様な学力や才能を持つ小学生が「中学受験にチャレンジできる機会が広がった」とポジティブに受け止めてよいはずだ。

現にこうした多様な新タイプ入試を新設・導入した私立中高一貫校の先生方は、一様に「これま



今春2019年入試では2月2日午後に行なわれた聖学院中「M型思考力入試」の様子。

で以上に多様な受験生（小学生）と出会うことができ、記述答案の文章や活動歴、プレゼンテーションなどから、多くの小学生の豊かな資質と“伸びしろ”を感じることができた」と、その確かな手応えを語っている。

「2020年大学入試改革」が若い保護者には歓迎された！

こうして現在の小学生とその保護者の前には、すでに間近に迫った「2020年大学入試改革」による大学入試の変化（＝日本の教育の変化）という大きな問題が生じている。

昨年から今年の中学入試にかけては、2020年大学入試改革による先行きの不安から、「大学付属校の人气が高まった」ということも一部で言われてきた。しかし、この1～2年の「大学付属校人気」の背景には、むしろ大学受験の準備（受験勉強）にとらわれることなく、アクティブラーニングや多様な体験学習などに時間をかけられる大学付属校が保護者に歓迎された、という面が大きいだろう。

同じように、今回の大学入試改革と日本の教育改革の方向性が、これまで触れてきた小学生の若い（ミレニアル世代の）保護者には、思った以上に歓迎されているという側面も見逃すことはできない。

何より知識を吸収することが重要で、それが思考力・応用力を高めるための大前提と考える旧来の「学力観」や、従来のような根強い「学歴信仰」を持たない新たな保護者層には、これまでのように「知識（インプット）の多寡と正確さ」を問わ



今春2019年入試でも2月1日午後に行なわれた聖セシリア女子中「B方式」の実施されたワークシート・表現入試の様子。



特集 保護者の意識と教育の変化から多様化した入試にチャンスを見出す！ 2019年入試結果から探る、2020年首都圏中学入試展望

2019年の首都圏中学入試トピック！《第1弾》

～「2020年大学入試改革」に先駆けて、中学入試の人気動向に「変わる大学入試と日本の教育」の影響が反映！～

今春2019年の首都圏中学入試で目立った動きと傾向を以下にご紹介しておこう。

《2019年入試の全体的なトピックス》

1.従来型4科・2科

最難関・準難関校の多くが志願者増。
人気校の新設午後入試に人気集中

- ◆男子校では麻布・駒場東邦・武蔵・栄光学園・筑駒、女子校では女子学院・雙葉・フェリス学院・横浜雙葉・浦和明の星女子、共学では渋谷幕張（女子）、早実、東邦大東邦など最難関校が志願者増。開成、桜蔭の志願者もほぼ前年と変わらず。
- ◆海城、本郷、浅野、鷗友、吉祥女子、立教女学院なども志願者増。
- ◆世田谷学園・巣鴨、香蘭女学校・普連土学園・山脇学園・晃華学園などの新設午後入試（算・国1科もあり）をバネに強気の挑戦か？
- ◆明大中野、東洋大京北など多くの大学付属校の志願者増。

2.得意科目選択・特化型

算数1科・国語1科(1科特化型)の大人気。
1科・2科・3科選択(得意選択型)の人気増

- ◆男子校では世田谷学園・巣鴨の2/1PM「算数1科」入試、女子校では普連土学園の2/1PM「算数1科」入試、山脇学園の2/1PM「算・国1科選択」入試、共学校では栄東の1/18の「算数1科」入試が大人気。
- ◆私立中入試の多様化が進むなかで、今年も「得意科目選択型入試」に多くの志願者が！そのなかにもバリエーションが広がり、4科から3科、英語を含む5科から3科、4科から2科、英語を含む5科から1科などの、多彩な得意科目選択型入試が人気を集める。
「算数1科」「国語1科」「英語1科」も得意科目選択の典型例。

3.新タイプ適性検査型

適性検査（各種含む）型入試の志願者増。
計6,524名が適性検査型入試に合格

- ◆私立中の「適性検査型（総合型・論述型・思考力型・自己アピール型）入試」は、前年の136校から147校に増加。
- ◆2/1AMの私立中「適性検査型入試」実受験者数は3,773名→3,856（△83名。前年比102%）に！
- ◆首都圏全体での私立中「適性検査型入試」実受験者数は9,484名→10,352名（△868名。前年比109%）に！うち6,524名が合格。
- ◆首都圏全体での私立中「適性検査型入試」のべ受験者総数は11,991名→12,225名（△234名。前年比102%）に！

2019年 私立中「適性検査型入試」の受験者数

2月6日現在 集計（一部推定）	実受験者数 （名）	志願者数 （名）	実受験率 （%）
首都圏全体	10,352	12,225	84.7%
2/1AM 入試校	3,856	3,945	97.8%

私立中の「適性検査型入試※」を実際に「10,352名」が受験。
「6,524名※」が合格（一部推定）。

※総合型・論述型・思考力型・PISA型・自己アピール（プレゼン）型入試を含む

4.新タイプ「英語（選択）入試」

英語（選択）入試の志願者増。
計1,002名が英語（選択）入試に合格

- ◆私立中の「英語（選択）入試」は、前年の112校から125校に増加。
- ◆2/1AMの私立中「英語（選択）入試」実受験者数は156名→355名（△199名。前年比228%）に！
- ◆首都圏全体での私立中「英語（選択）入試」実受験者数は1,378名→1,826名（△448名。前年比136%）に！うち1,002名が合格。
- ◆首都圏全体での私立中「英語（選択）入試」のべ受験者総数は、2,381名→3,007名（△626名。前年比126%）に！

2019年 私立中「英語（選択）入試」の受験者数

2月6日現在集計 （一部推定）	実受験者数 （名）	志願者数 （名）	実受験率 （%）
首都圏全体	1,826	3,007	60.7%
2/1AM 入試校	355	459	77.3%
2/1PM 入試校	208	263	79.1%

私立中の「英語（選択）入試」を「1,800～2,000名※」が受験、
「1,002名※」が合格（一部推定）。

※2/6時点で「英語（選択）入試」の志願者数・実受験者数の内訳を未公表の入試は含まず

5.中学受験者数は5年続きて増加へ！

～多様な入試にチャレンジする小学生が増加～

今春の首都圏中学入試では、私立・国立中学校の受験者総数が、前年の4万5千名から4万7千2百名（推定）まで増加。公立中高一貫校の受験生を加えると、約5万9千5百名（小学校6年生のおよそ5人に1人）が中学受験（受験）に挑んだことに。2020年の大学入試改革が目下となる来年以降は、さらに中学受験率は高まることが予想される。

れる大学入試よりも、むしろ「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が問われるという今後の大学入試のあり方が歓迎されているという見方もできる。それとともに各大学での個別

入試では「創造性・独創性・芸術性」までを求めるという今後の大学入試のあり方に賛同する人が、すでに数多く存在する印象さえ強まってきた。

そうした若い保護者の多くは、自らグローバル

企業やビジネスの第一線で活躍する働き盛りで、今後の大学入試や新たな教育で求められる「21世紀型スキル」やコミュニケーション能力こそが
必要な時代となっていくことを肌で感じている世
代でもあるからだ。

目前に迫った「大学入試改革」が、当初の予定
より失速したとか、本格的な改革として実現する
のは遅れそうだといった否定的見解もなくはない
が、むしろ今後の小学生の若い保護者にとってそ
れは問題ではなく、「わが子が社会で生きる」10
数年後を想定して、すでに“その先を見つめる”
保護者が増えていると考えるべきだろう。

カギを握る アクティブラーニングの成否

こうして現在の小学生が高校を卒業するときま
では、間違いなく大きく変化すると見られる大
学入試と日本の教育において、そこに向かう教育
改革で求められる喫緊の課題が「アクティブラ
ーニング（探究型学習）」の導入だ。このアクティ
ブラーニングの是非や解釈（定義）が一時は盛ん
に論議されてきたが、この是非についての論議も、
ミレニアル世代の保護者にはもはや無用なものな
のかもしれない。

今後の教育の変化に小学生の若い保護者世代の
多くが期待していることは、「わが子が楽しく、
主体的に学びに取り組めて、将来の社会でより良
く生きていける力を育ててくれるのならば、それ
に越したことはない」というような、率直な感覚
なのではないだろうか。

たとえば10数年前の中学開校当初から、「探究
学習」を重視してきた埼玉のある私学の理事長は、
「勉強が嫌いな子どもという表現をする大人が
いるが、そういわれてきた子どもは従来の一方通行
型の講義になじまないだけ。『授業が楽しい』と
思えれば変わる！」とか、さらには「アクティ
ブラーニングの最大の効用は、同じ教室の友達との
意見や考えの違いを認め合うことで、互いに『自
己肯定感』が高まること」と明言している。

実はこうした考えに反対する小学生の保護者は
少なく、否定的意見を述べているのは、大半がそ

れより年上の、すでに子育てを終えた世代の教育
関係者が大半といってもいい。

確かに、最近ではどの学校もアクティブラーニ
ングの導入を謳うようになったことから、どこの
学校が本当の意味での「主体的・能動的な学び（授
業）」を実践できているのか、表面的な情報だけ
ではわかりにくい面もある。

それを見極めるために、なるべく多くの私学に
足を運び、保護者が自身の目でそれを判断するこ
とが「学校選び」にあたって大切な時代になって
きているのだ。

ICT教育にはまったく 違和感を持たない親世代

アクティブラーニングと同様に、いま教育現場
での喫緊の課題とされる「ICT教育」の導入につ
いても、現在の小学生の若い保護者世代と、それ
以前の世代とは受け止め方がかなり違ってくる。

ミレニアル世代の保護者は、すでに高校生～大
学生の頃から、世の中にPCが広く普及し始め、
携帯電話も普及した時代に学生時代を過ごしてき
た世代。Web（インターネット）利用は当たり前。
社会人になってからはノートPCやモバイル機器
も普及し、やがてはスマートフォンやタブレット
を何ら抵抗なく使いこなすようになった世代でも
ある。

そしてその子どもたちである現在の小・中・高校
生のスマホ普及率は、全国的にも80%を超えた
とさえ言われている。



昨年2018年入試から新設された宝仙学園
共学部「理数インター」の新人入試「理数インター」
の様子（2019年）。同校の授業にも導入さ
れている新教科「理数インター」のアクティ
ブラーニングを入試当日に体験する形態だ！



特集 保護者の意識と教育の変化から多様化した入試にチャンスを見出す！ 2019年入試結果から探る、2020年首都圏中学入試展望

仕事でもプライベートでもPC、スマホ、Webを日常的に使ってきた世代の保護者であるがゆえに、中学入試の世界にも、一気に「Web（インターネット）出願」システムの導入校が増加し、今春2019年入試では、首都圏の私立中の80パーセント近い学校がそれを導入して、多くの受験生の保護者に歓迎されているという事実は、その世代変化を反映したものだ。

そうした世代の保護者が、中高一貫校での「ICT教育」の導入に理解を示さないはずはない。リアルタイムで情報を共有し、教室での学びのなかでもクラスの仲間の意見や考え、作品などを瞬時にシェア～共有することで、「主体的・探究的な学び」を速やかに進めるための手段・道具として、わが子がそれを使いこなすことに抵抗感を持つ保護者は、ほとんどいないか、いたとしてもごく少数だろう。

むしろ保護者世代が携わるビジネスの世界では、そうした道具を使ってプレゼンテーションをし、互いに理解を速やかに深める力や技術が、当然のように求められている。

私立中高一貫校のなかには、すでに生徒一人一台のタブレット（iPadなど）を持たせる学校も急速に増加した。しかも学内無線LANによる利用に限られたWiFi型ではなく、登下校の途中や自宅でも使えるセルラー型のiPadをあえて持たせ、学内で3Dプリンタを自由に生徒に使わせている工学院大学附属中高のような先駆的な私学もあることに注目したい。

「21世紀型スキル」の育成は時代の要請

この2～3年でとくに注目されるようになった「21世紀型教育」も同様に、現在の小学生の若い保護者世代からは歓迎されている。

この「21世紀型教育」を私学のなかでも最先端のレベルと充実度で実践する三田国際学園が、共学化から5年続きで今年も大きな人気を集め、すでに難関校のひとつになっていることにも注目したい。今春2019年入試では、ほかにもそうした「21世紀型教育」的な要素や教育展開を標榜

する私立中の大半が人気と難易度を高めている。こうした傾向は来春以降にも、ますます加速するだろう。

いまのところ日本国内で「21世紀型教育」という表現で新たな教育の導入～実践を真正面から謳っているのは、「21世紀型教育機構（旧・21世紀型教育を創る会）」に加盟する10数校の私立中高だが、そのほかにも開智日本橋学園や昌平のように「IB（国際バカロレア）プログラム」の認可を取得したり、文化学園大学杉並のように、カナダと日本の高校の両方の卒業資格が得られる「ダブルディプロマ」などの“世界標準の”教育プログラムを導入したり、そうした学びの要素を自校のオリジナルな教育に取り入れることで、新たな学びのスタイルの導入に踏み出している私学は数多い。

さらには「IB（国際バカロレア）機構」をつくったクルトハーン氏が設立した世界の高校生の交流ネットワークである「ラウンドスクエア」に正式加盟した八雲学園などの動きも注目されている。

そもそも、欧米では「21世紀型スキル」という表現がすでに教育の世界でも当たり前のように使われているに関わらず、日本ではまだ“少数派”にとどまっていることのほうが、むしろ不思議なことといえるだろう。

先進国の技術や文化を導入することで国力を高める、いわば“キャッチアップ型”の教育が求められたのは、すでに過去のこと。今後は「正解がひとつに定まらない問い」について、多様な国々の多様な意見を持つ人々と話し合い、協調・協働して、環境保護やエネルギー不足、紛争や貧困の



今春2019年入試から新設された相模女子大学中学部の「プログラミング入試」はマスコミにも注目された！

来春2020年の入試トピック！《第1弾》

～小野学園女子と聖ヨゼフ学園が共学化へ！～

■小野学園女子（東京・品川区。女子校）と聖ヨゼフ学園 （神奈川・横浜市。女子校）が共学化へ！

来春2020年から、小野学園女子（東京・品川区。女子校）が中高とも共学化し、品川翔英中学校・品川翔英高等学校と校名を変更して、新たなスタートを切る。

募集定員や男女比などはまだ公表されていないが、同校は、JR総武線快速横須賀線「西大井駅」下車徒歩5分、JR京浜東北線・東急大井町線・りんかい線「大井町駅」下車徒歩10分、京浜急行線「立会川駅」下車徒歩18分という立地にあり、とくに学童生徒数が増加している東京の江東区豊洲エリアや、神奈川の武蔵小杉・鶴見エリアからのアクセスが良く、同じ品川区で近接する青稜中高の人気の高まっていることから、通学可能なエリアからどのくらい人気を集めるか注目される。

同じく来春2020年から、聖ヨゼフ学園（神奈川・横浜市。女子校）も共学化することを、昨年7月に公表している。同校はすでに系列の聖ヨゼフ学園小学校（共学校）で「IB（国際バカロレア）プログラム」を導入し、今年1月には日本の小学校では初の「IB-PYP（プライマリー・イヤー・プログラム）」認定校となっている。これに続いて中高でも「IB-MYP（ミドル・イヤー・プログラム）」認定校となる手続きを開始している。中高の共学化にあたり、この新たな教育展開にどれだけ期待が集まるか、いまから注目される。

同校は、JR「鶴見」駅西口より徒歩15分、またはバス5分の立地で、JR・東急・横浜市営地下鉄の「新横浜駅」「菊名駅」「綱島駅」からバスの便もあり、やはり学童生徒数の増加している武蔵小杉・鶴見エリアからも近いと、認知度が高まると急速に人気が増加する可能性もあるだろう。

■2020年にはJR山手線に50年ぶりの新駅 「高輪ゲートウェイ駅」暫定開業！その影響は？

来春2020年には、東京オリンピック・パラリンピックの開催と合わせて、現在各地で、スポーツ施設の新改築や交通網の拡充が進められている。そのなかで、JR山手線に50年ぶりの新駅「高輪ゲートウェイ駅」の暫定開業が予定されている。

この新駅の開設によって、近接する高輪（東京・港区。男子校）へのアクセスが便利になる通学エリアが増え、同校の人気の高まるのが予想される。

このほかにも、地下鉄やその他の交通網の延伸や乗り入れなども計画されていることから、最近のつくばエクスプレスや東京メトロ南北線などのように、都心部と周辺エリアや、羽田・



来春2020年から共学化する小野学園女子。立地も良いだけに、どれくらい人気が集まるか注目される！

成田空港などと各地を結ぶ交通網も発展して、通学エリアが広がる、あるいはアクセスが便利になる私立中高一貫校も出てくることが予想される。

■茨城県立の各地のトップ高が、この2020年から順次、公立中高一貫校に！

こちらは公立中高一貫校の話題になるが、来春2020年から2022年にかけての3年間で、茨城県立高校が立て続けに中高一貫校化する計画が、先に公表された。

2020年には県立の太田一、鉾田一、鹿島、竜ヶ崎一、下館一高が、翌2021年には水戸一、土浦一、勝田高が、その翌年2022年には下妻一、水海道一高が中高一貫校となる予定だ。

もともと校名に「一高」が付く各エリアの県立トップ高は、茨城県内各エリアの最人気校だけに、これらの学校の中高一貫校化によって、茨城県の各エリアの「中高一貫教育への注目」がさらに増し、中学受験生も増加することが予想される。

なお現在の小学5年生が受験する2021年には、川口市立の高校が、まず1校、中高一貫校化する計画も公表されている。

さらにこの2021年から2022年にかけては、東京都立の「併設型」中高一貫校であった、都立両国・武蔵・富士・大泉・白鷺の各校が、高校募集を停止し、中学募集定員を増やす計画も昨年公表されており、今年2月には年次計画も発表された。武蔵と富士が2021年、両国と大泉が2022年に高校募集を停止予定（白鷺はどちらかの年度）で、同時に中学の募集定員を増やす見込みだ。

こうした「公立中高一貫校の受検市場」が拡大することによって、私立中の人気動向や入試形態、併願パターンにも変化が広がって来ることが予想される。

撲滅、持続可能な社会の構築といった、世界的な課題の解決の糸口を探っていける力が、未来を生きる子どもたちの世代には求められている。

私立中高一貫校でも多くが認可を受けている「ユネスコスクール」では、国連が2030年の目標達成を掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」、通称「グローバル・ゴールズ」の達成を全世界の

加盟校でめざしており、それ以外の私立中高でも多くがこの目標への取り組みを自らの教育プログラムとして導入～実践し始めていることも見逃せない。

そういう「21世紀型スキル」の育成は、教育の現場における世界的な課題であり、“時代の要請”であると考えておくべきだろう。